





未ノ元日より

彈り乍ら口上
 を以て御披露
 御子様御座々
 遊ばせ給へ
 極つて私見御
 降昌仕りて日
 品に難き仕合
 至に存じ候
 右御禮の爲去
 諸職人透の畫秋
 節味仕考へ諸事
 細澤山所繪紙
 當未の元日仕
 無類大賣仕り
 候間遠方にお
 方様は小賣に
 御用多しと尋
 ね下され候
 御下候限らず
 ひれ下候願
 乍ら御手習
 年々御風聴
 様下され候
 し下候程
 偏に希ひ上げ
 奉り候。以上。

御年玉物品々御商ひ物卸し仕り候

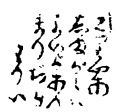
江戸通油町 葛屋重三郎



江戸通油町
 葛屋重三郎
 江戸通油町
 葛屋重三郎

葛屋重三郎

未ノ元日
 御披露
 遊ばせ給へ
 極つて私見御
 降昌仕りて日
 品に難き仕合
 至に存じ候
 右御禮の爲去
 諸職人透の畫秋
 節味仕考へ諸事
 細澤山所繪紙
 當未の元日仕
 無類大賣仕り
 候間遠方にお
 方様は小賣に
 御用多しと尋
 ね下され候
 御下候限らず
 ひれ下候願
 乍ら御手習
 年々御風聴
 様下され候
 し下候程
 偏に希ひ上げ
 奉り候。以上。

[illegible]

必ず引札の
安物に喰ひ込み
美しい女房を持
ちたがらず、甲
斐くしいが身
代の徳用向だと
常々兄貴のいは
れたを、趣向に
してとう／＼三
冊こじつけまし
た。

「こりやあ縞柄
は好いが餘り
地が悪い。」

「縮緬の板締と
本八丈の變縞
を見せて下せ
え。そして花
色襷子の袖口
も忘れめえに
よ。」

「ソレハ値段も
恰好物でござ
ります。」

「お坊さんのお
祝にはいゝべ
ゝが、たんと出來ます。」



形雛屋紺口間世

無地 むち
 情なしもめん じやうなしもめん
 所故 じやうこ ひつこひの
 抱のぼり だいのぼり
 ひつこひの抱登
 りは番頭がたき
 のすく紋にて得
 て女に嫌はるゝ。
 何をいつても染
 附の悪い無地太
 無し木綿につけ
 てよし。又は悪
 い事しな棧留、
 飛んだ目に青梅
 縞などにつけて
 裏は鮑の片面小
 紋、よしなせい
 この半襟をかけ
 れば、うつりが
 よけれど、皆い
 ふ事の辻褄が合
 はぬ故、女にか
 けてはいかん紋
 の始りなり。



「琴高仙人が異
見をいはいが
二十四孝の王
祥が裸になつ
て説事をしよ
うが、此鯉ば
かりは思ひ切
られぬ。そん
な怖い顔を
して叱らずと、
一つ笑ひ鯉に
してくる氣
はなししか。こ
んなこくせう
面奴が。」
「エ、モ焦れつ
てえ。食ひつ
くによ。」
「源さん久しい
もんだ。奥に
おふくろさん
が聞いて居な
さるわな。」



模様

おい蘭に

しん草

色頭の黒い鼠

花魁に新造をつ

けて染賃一兩一

分の痛事なり。

表は羽二重と見

えて裏は大の革

羽織なり。故に

ふられる時は合

羽の代りもする

苦界十年を年一

杯に縫出せば、

鼻の下三尺程の

びて来る。色は

頭の黒い鼠にて

うら／＼へ引き

ずりとみたがる、

至つて汚れぼく

して始終眞黒と

なる。これを此

廊の馴れそめ模



様といふ。

「二十日鼠に四十兩、遣ひ果して二分の無心とはしがねえ身の上になつた。昨夕格子で話し残した事がある。晩にはきつときねずみくさ」
 「コウりきんだ所は、荒獅子男之介といふ見得ておす。これで縛られて居ると、雪姫といふ身もありいすさ。」
 「忠さんお出なんし。また猫撫で威されなんすな。」



形鑑屋紺口間世

大紋^{おほもん} 三くわい松^{さんくわいしょう}
 床花^{とこはな}の散らし
 今夜の注文は
 大もんをすつ
 と這入る脊筋
 の仲の町に三
 會松^{かいしょう}を抱き合
 せ、裾にちよ
 つとね笹のあ
 しらひ、縫は
 床花^{とこはな}の散らし
 を金糸^{きんし}の山吹
 色で落^{おとし}をと
 ひよこあひ染
 の下着^{げさく}は、禮文^{れいぶん}
 の反故染^{はんこぞめ}、小
 菊十帖^{きくじゅうしふ}のかへ
 し小紋^{こもん}、中入^{なかいり}
 の眞綿^{まゐん}で首を



てんぼうち小紋に
いざり松
てんぼうち小紋にいざり松の紋所は、堀の内や雑司ヶ谷詣りの晴着によし。かなひませぬ盲小紋を染返して妙なり。

「今日は根つから詣りがねえ。あとの八日も降られて大くされだつけ。」

「非人夏のうちといふ如く、から寒くなつちやア往生だ。」



[illegible]

「トツチリトンく。」

天子

司馬遷の史記

[illegible]

565

黒人素人の
 大ど島
 黒人素人の大
 年増は、派手
 にも地味にも
 向く縞にて、
 三十振袖に仕
 立て、一寸見
 れば十五六も
 若く見える。
 然しものきを
 悪くすると、
 顔へ火尉斗を
 あてゝも持前
 の皺が延びず。



いづれ亭主の
さすりぎにす
れば始終お徳
用向なり。
「駿河屋のか
ゝさんに何
處か似て居
んたあ。」
「花魁早く奥
山へおいで
なんし。」
「それ者ださ
うなが、よ
い年と見え
る。」



煎じ茶の法事
格子は、婆様
の嬉しがる縞
柄にて紋所の
五葉牡丹餅を
小豆色に染め
あげた地の黒
砂糖に裏は黄
粉色の鬱金絹
五所紋の五つ
盛られては胸
に痞へて着に
くゝなる。こ
れ百の口が十
六文程ぬけ六
の好く定紋な
り。

せどちやのわらじ
 そういハるあさぬの
 うまーくあまう
 母さんんあまの
 まうずうぐさ
 くらとあぐさ
 ぐふとあぐさ
 どのくわさき
 かういききき
 ぐのうききき
 ぶさあまの
 ぶさあまの
 ぶさあまの
 ぶさあまの



助六の遣手は
白酒に酔ふ筈
だが、牡丹餅
だけ眞面目で
居る。
「朝顔煎餅よ
り諸事牡丹
餅の事だ。」
「小豆の方も
黄粉の方も
味に違ひは
無けれども、
うまいとま
づいは間夫
と客。」
「何もかう頭
へ下駄をの
せて牡丹餅
を食はずと
いふけれど、
これでなく
つちやア意
休めかねえ。



このめづりの
うたにまじり
やうなうたを
かきつけろ
おんなの
ごころ
まじりまじり
うたの中
うたの中
うたの中
うたの中

Handwritten notes on a piece of paper:

W.C.
G. H. C. S. R.
S. R.
the - Out the

せふぶち
 とのいせ
 二のまん
 ぢうて
 うろて
 ののまん
 ぬか
 おろ
 ぬか



[illegible]

「てりきれてゐる、さといふまゝさういふものがけりやうなものであるぜ」



向の鬼と聞え
ればいゝが。
「手前切れて
しまつたといふが、まだ刺青が消さずにあるぜ。」
「ほる氣なら尋常にして居なんし、未練を出しなんすな。」
「畜生あまめ、襟元についておれを突出した代りに、今夜は生けちやア歸さねえぞよ。」

手前切れてしまつたといふが、まだ刺青ほりものが消さずにあるぜ。」

さすにある
せ。」

உலக

「ほる氣なら

尋常にして
居なんし、

未練を出し

なんすな。

「畜生あまめ

襟元につい

ておれを

出した代り

に、今夜は

生けちや

歸さねえ

よ

ついで
きりめ
のうたは
まむしの
うたとと
きくれば
さけ

あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた



七生までの勘當
勘當はだも
うちは大
めん
七生までの勘當
稿は息子毛氈を
被る時に着る着
物のな。我が身
の布團に仕立て
れば、今夜から
寓所を失ひ、あ
やまつた心なり
さまのみとてう
んすれば、至つ
て仕立簀えがす
「うぬ其頃から
してが氣に食
はぬ、出て失
せう」
「久離をきるか
らは唐茄子程
の涙もこぼさ
ぬぞ、こな
へば野郎奴が。」

七生
までの 胡おめさま
うち、 大いとし

「うね
きて



紋五三ノ切きり

至つて聲も丈

夫向にて、肥

前土佐薩摩産

などから染出

す。
紋所の五

三の切は、き

て見る人を泣
かせて歸す文

なり。

「此本の繪組
は頭が少な

*Lodovico
Ludovicus*

三三三

ちやうど、うろたへてゐる
 上り、下りの二つは、
 のびてくつろぎ、中は、
 こぼれ、のち、あつ
 あれ、バツ、あつて、入
 る、も、う、う、う、う、
 ちやうど、いふ、人、は、
 さう、また、おど
 う、う、う、う、
 ちやうど、いふ、人、は、
 まて、いふ、
 人、は、
 ちやうど、いふ、

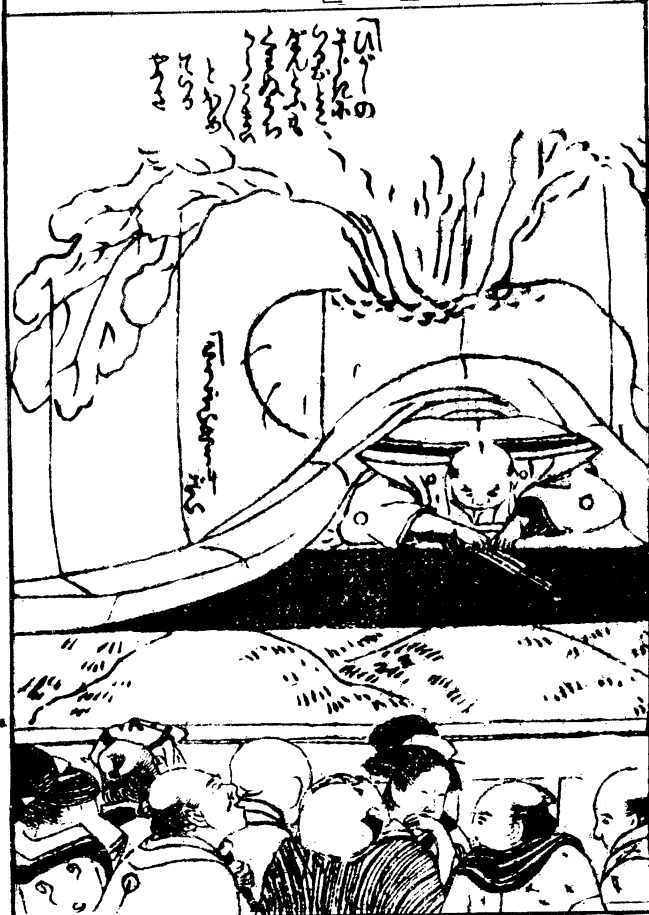


くつてよい
と思つたが、
此一丁で大
きに喰ひ込
んだと板木
屋が小言を
いふだらう。」

「早く隅太夫
が聞きたい。」

「東の棧敷に
居る男は辨
當も食はぬ
うちから、
うまいうま
いと褒めて
居る奴さ。」

「東西とう引
やう。」



形鐘屋紺口間世

地いろにあ
いみる茶
慈解いつそ
くろうの星
地色にあひ見
る茶は浮氣の
樺色にまがひ
なんぼ心を疊
みつけても、
氣が揉めて無
茶苦茶になり
たがる。どう
いふもんの苦
勞の星を染め
抜にして後生
でさんす、主
と恰に仕立榮
がする。



「上總屋へ来
なんすは大
方重さんで
おつせう。」
「隠しなんす
な二丁目へ
行きなんす
といふ事は
とうから知
つて居いす
わ。」
「手前餘つ程
手がお出来
だ。何處の
客に習つた
のだ。」
「若い衆が變
つたから初
會の顔で上
んなんしな。」



形雛屋紺口間世

おひさま
のそら
めいさろ
ろろであ
ろろを
人のものを
そろあへ
すうと
よここの
かといて
やひも
それみ
げんのお
ひけり
いん

あつぱ

人の心のうちを

おひきの熱い



見えぬく。」「
 畢丸も錢に
 なるものな
 ら置いて参
 りませう。
 命ばかりは
 お助け下さ
 りませ。」
 「逃げたの内
 に横木瓜と
 するがよい。」
 など、この
 旅人よくよ
 く慌てたと
 見えて、こ
 んな新しい
 地口をいひ
 ながら逃げ
 て行く。



かこひのす
きや縮
染うす茶が
へし
園ぢやうの敷數屋縮
は一は反が四疊
半の定めにて、
片肘ひでしがつかへ
て、至つて窮
屈な仕立なり、
遠州まづしより出づ
る。地は薄茶
がへし濃茶が
へし、至つて
高慢臭かうまんくさい爺汚
い染色なり。
おちやつびい
が、いゝべゝ
を着たやうに
褒めそやすを

ささいのすれや
りいといはんず
ろぞおのまを
ちかよふにひら
つていづるて
まゝとあり
せんりせん
あうぜん
よりのつねは
うもちやえ
くーりや
てそまん

かまへの
さるやちごこ
際うを茶さへ

[illegible]

いふことを言ふ。
いふをいふ。まゝと
いふは、いふの
太くいふの
いふといふ
いふ

馬琴が新作
の稗史に題
す。

青柳や
あやや

日は

横糸に

くれば鳥

東岡舎

羅文

題馬琴新作稗史

青柳や
横糸に
くれば鳥

東岡舎

羅文



曲亭馬琴作

十五五

